



私は幼い時より犬は大好きでしたが飼って貰えず、青春は戦争時代、以後66才までハードな会社勤めをしてきました。飼えない代わりに知人の犬の世話、捨て犬の保護と飼主探しをして、行政機関の動物への知識の低さと飼主の非常識の多いことが分り、動物のために広く世論に呼びかけたいと昭和54年「エルザ自然保護の会」に入会、ペンによる活動を続けています。昭和56年「国際障害者年」の新聞のトップに、盲導犬と全国行脚の視障者の記事が載りました。盲導犬を世間にアピールした第1号で、後援の「ボランティアグループ」に入会したのは、犬が好きだけでなく目が全く見えないことは過酷な障害と思っていたからです。その視障者を裏方で手伝い、犬を虐待する行為を見ました。犬と視障者を訓練した「盲導犬協会」の責任者に会い善処と改善を求め、他の協会のあり方を調べ、視障者には手伝いながら「犬

の大切さ”を色々な角度から説き続けました。この問題を会誌「エルザ」に発表し、その本をもって新聞社、NHKに行きましたが、美談でなく質している人物がこの事業の第一人者なれば取り上げてくれませんでした。マスコミのこの考え方は20年経った今も変わらないでしょう。近年、テレビ等に見る盲導犬の美談に明快な思いにはなれませんが、その視障者は私の言葉を理

解され、犬は亡くなるまで温かく扱われたことは努力の甲斐があったと思っています。

本が出た頃、オリバーさんが「エルザの会」を通じて「日本の盲導犬事情を知りたい」と云って来られ初めてお会いしました。「殆どの盲導犬は飼主と良い関係にある。私の見た虐待を、一例にすぎぬ、と善処しない責任者に質している」と話し理解されました。当時オリバーさんは職場の大学の往復に捨て犬を拾い、非道な飼主には説得し、手作りの絵ハガキや冊子を配り、一人で活動されておりその姿に私は感動と勇気を受けました。

その頃私は東大阪の生駒山麓に住んでいましたが、捨てられた仔犬の空地をテリトリーに必死に生きる姿に給餌を続けて犬は1才、避妊手術のあと病院に預け飼主を探し見つからず、私はマンションを出て飼う決心をしました。同じ町に小さな家を建て引取った時犬は

3才、私は60才で念願の飼主になりました。推定5月生まれでメイと名づけ留守番の犬のために放し飼いで安全ようにしました。大変な苦勞も、犬と暮せる喜びは大きくメイは云い知れぬ豊かなものをくれましたが、14才の春獣医の誤診で死亡。平然と嘔をつく獣医に調停を起こし勝訴でしたが、思い出に満ちた地に住むことは耐えられず転居を考えていました。

その年の暮、「アーク」のカレンダーの犬の写真に釘付けになりました。里親募集の何十頭の中の小さなプロフィールにメイが生き返ったようなショックを受けたのです。エミリー、その独特の雰囲気はその犬の総てを語っていました。冷静に今考えますと、それは容姿でなく、メイとエミリーのもつ魂が同じものだったのでしょうか。翌、平成10年1月から6月までエミリーに会いに「アーク」に行きました。初めて会った時彼女はダンボール箱の奥にいて、オリバーさんのやさしい声にも仲々出て来ず、ハーネスをつけると散歩の喜びに飛び出して私達がお互いの顔を見たのは裏山に入ってからでした。木に繫いだリードが外れ、脱兎の勢いで逃げるエミリーを追いかけると行き先は「アーク」でした。「当り前」「長年の習性」と云い切れないと思います。「アーク」の自分の居場所が大好きなのは、スタッフの皆さんの愛情と努力の蓄積が生んだ結果でしょう。この年の秋、神戸に引越し7才のエミリーを迎えました。昔と変り犬を飼えるマンションは増加しても、その「狭き門」は経験した者でないと分りません。「よく来てくれたね」私は心から彼女にお礼を云いました。「アーク」と様子が一変し、超シャイの彼女は不安で部屋の隅に張りついたように動かず、無抵抗な犬の姿を見る時「生殺与奪」は飼主にある言葉だと思うのでした。六甲山麓、芦屋川と散歩の足を伸しリードを外して存分に遊ばせましたが、「アーク」の仲間達との賑やかな生活から、

Pimm passed away. Some of you might know him from the sponsorship form a few years back when he appeared on the cover. Other than that he was a pretty ordinary dog. Unassuming, a bit shy, no pedigree, and never one to insist on his own opinion. It was very easy to overlook him. Pimm was rescued at a festival with a badly injured leg, festering in an old cast. Seems someone could not be bothered with the time or cost involved in continuing the treatment. So they dumped Pimm, and he walked with a limp the rest of his life. I'm sure Pimm never protested this injustice. When I first met him he was sharing a pen with Rick. Almost the complete opposite of Pimm, Rick was a very outgoing, 'I'm-in-charge' type of dog and I think this is what made them such a great pair. It was obvious that they enjoyed each others company and I always looked forward to walking them. When Rick passed away, Pimm was visibly depressed. I don't think he ever really got over his loss of Rick.

Although I know Pim was well cared for in the ten years he lived at ARK, there is a part of me that feels we let him down. Why couldn't he find a home? Maybe it was society that let him down, a society that places too much emphasis on puppies or pedigrees and doesn't see much worth in a dog like Pimm. But for me Pimm represents the very core or essence of ARK's work: taking in and caring for the unwanted, the abandoned, the abused, the ones nobody else will take in. We know that Pimm and the countless others like him are a treasure to be cherished.

Whenever I think of Pimm, I am reminded of a verse from the Bible describing the order of things in the afterlife. "But many who are first will be last, and many who are last will be first". You were always first with me Pimm.